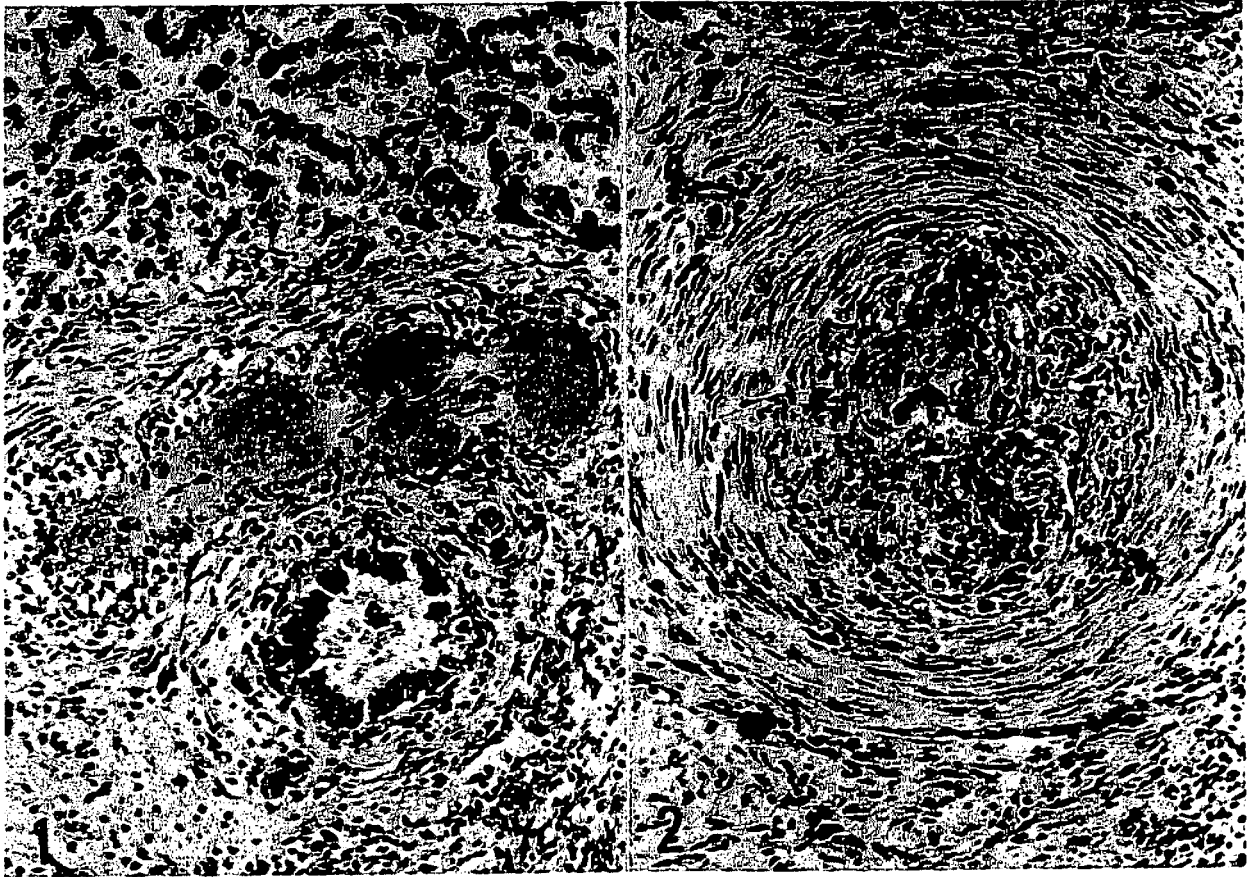


山羊の実験的アレルギー性血管炎

北里研究所出題 第18回獣医病理学研修会標本No.278



標本：山羊の固有肝動脈，肝並びに腎

症例は家兎IgGに対する免疫血清作出を目的として1976年7月に当研究所が1農家により購入した山羊の1頭に認められたものである。導入後1週間隔でcomplete freund's adjuvant 加家兎IgGを1回30mgあて四肢筋肉内へ計16回（7ヶ月間）注射し，最終注射の1週後に死亡した。

肉眼的には，固有肝動脈の剝離性動脈瘤形成（5×2.5cm）およびその破裂に伴う腹腔内大出血，肝門部胆管壁の肥厚，肺尖葉の水腫および四肢の注射部の陳旧化膿およびadjuvantの乳化物残留がみられた。

組織学的に，特徴的所見は小動脈および細動脈に主座する多発性血管炎で，好発部位は肝，肥厚した胆管壁，動脈瘤壁および腎であった。その病態は新旧様々で，急性期とみられた変化は血管壁の水腫，硝子様物質沈着および組織球浸潤を主病変とし，他に血管周囲の水腫および形質細胞浸潤を伴った（図1，×80）。慢性病変は血管壁における肉芽組織増殖および囲管性の著明なonion-skin typeの線維化を示した（図2，×80）。同一血管で慢性病変と急性病変とが混在することが多かった。

各臓器・組織の変化は，固有肝動脈の動脈瘤は内・中膜の壊死・剝離，壁内出血，血管炎，肉芽組織増殖および平滑筋細胞の再生より成った。肝門部の肥厚した胆管は粘膜上皮の腺腫性増生，固有層および周囲組織における血管炎，形質細胞浸潤および結合組織増殖より成り，肝では小葉間間質における概して急性の血管炎および胆管病変，結合組織増殖および偽胆管形成より成った。腎では血管炎の著明な部位に一致して皮質領域が楔状に硬化性変化を呈し，Nephronの消失，硝子様物質沈着，硝子様円柱，糸球体硬化および囊への癒着，囊の線維性肥厚および硝子様物質沈着ならびに糸球体の局所壊死がみられた。その他の腎領域では糸球体病変（腫脹，mesangium細胞増数，囊への癒着）が目立った。

動脈瘤をはじめ肝および腎の諸病変は血管炎の発生が素地となり惹起されたものと考えられる。症例に観察された血管炎の病態はヒトその他の哺乳動物に稀にみられる結節性動脈周囲炎あるいは血清アレルギー等の所見に類似した。

診断名：山羊の実験的アレルギー性血管炎